

狭山池誕生

推古朝の大開発 — 狭山池誕生 —

わが国最古のダム形式のため池、狭山池。

『日本書紀』崇神天皇八二年七月条や、『古事記』垂仁天皇段に狭山池築造に関する記述がみられます。これらが示す築造時期は3世紀ごろですが、考古学研究から導き出される築造時期は5世紀あるいは6世紀ごろとかなり異なるものでした。このため、狭山池がいつ造られたのかという問いに対する答えは、かつては研究者によって様々でした。

昭和63年から平成14年にかけて施工された平成の改修に伴い、狭山池全域を対象とした文化財の発掘調査が実施されました。その際に、狭山池の水を塞ぎ止める北堤と東西兩岸から、治水灌漑に

関係する多くの文化財が出土しました。とくに、北堤の盛土の中には築造当初の堤が、その真下からは、池の水を通していたコウヤマキ製の樋管・下層東樋が、ほぼ完全な状態で全長約70mにわたって発見されました。丸太をくり抜いた樋管を7本つなぐ下層東樋は、表面を手斧で整形するなど、古墳の割竹形木棺にも似たその外形は、見るからに古代につくられたものです。日本では、コウヤマキ・ヒノキ・杉の樹種の

年輪変動幅をデータ化し、その伐採年を特定する年輪年代測定法が確立しています。奈良文化財研究所の測定により、下層東樋のコウヤマキは616年の春から夏ごろに切り出されたと判明しました。今から約1400年前の616年は、推古天皇十四年で、時代区分では飛鳥時代と呼ばれています。

さらに、築造当初の堤の上からは、須恵器窯が見つかりました。須恵器の型式から、7世紀前半、遅くとも620年ごろまで操業していたと明らかになり、狭山池の最初の堤が築かれたのは、下層東樋の材が伐採された616年ごろだと判明したのです。

飛鳥時代の堤は、長さ約300m、幅約27m、高さ5.4m。細かい砂が積み上げられていました。谷底を流れていた川が運んできた砂でしょう。堤の断面を観察すると、水平方向に多くの茶色い縞模様があります。これは、アラカシの枝葉を敷き並べた層です。砂と枝葉を互いに盛りながら踏み固めて堅固な土盛りを築く、敷葉工法と呼ばれる古代の土木工法が用いられていたのです。

この工法は、紀元前に中国で生まれ、朝鮮半島から日本へと伝えられました。韓国の全羅北道金堤市には、同じ敷葉工法によって築かれた堤、

北堤

狭山池の水を1400年の間守ってきた北堤。その断面をみると、飛鳥時代から現代に至るまでの改修の歴史が読み取れる。中央付近で切り取った堤の断面の大きさは、高さ15.4m、幅62m。人工樹脂で固め、狭山池博物館で保存展示している。

碧骨堤があり、狭山池の「兄弟堤」だと考えられています。

推古天皇の時代は、海外の文化・技術を積極的に取り入れ、道路の整備や池溝の開削など、畿内地域での大開発を次々に実施した時代です。狭山池の築造は、当時の先進技術を用いた大開発です。推古朝の国家的事業として位置づけることができます。

飛鳥時代から奈良時代へ

飛鳥時代に誕生した狭山池は、下流域を潤し、米づくりが可能な土地の開発を促進しました。その後、幾度となく改修が重ねられ、その灌漑範囲も拡大していきました。現在の狭山池の原形ができたのは、奈良時代です。

731年（天平三年）、広く人びとの信望を集めた僧、行基が狭山池を改修し、ほとりに狭山池

院と尼院を建てました。762年（天平宝字六年）には、国家による狭山池の改修が行われ、『続日本紀』によると、8万3千人の労働力が必要とされる大規模なものでした。発掘調査では、敷葉工法を用いて堤の幅を倍に広げ、高さも3mかさ上げし、下層東樋の樋管を延長した、大がかりな天平宝字の改修のようすが明らかになりました。狭山池博物館では、出土した狭山池の文化遺産を発掘現場から運び込み、そのまま保存展示しています。ぜひ、古代の狭山池を体感してみてください。

今回の「狭山池一四〇〇年の歴史②」は、「大勧進重源」と題し、鎌倉時代の狭山池改修とそれに関わった人びとについて紹介します。

問い合わせ 歴史文化グループ

行基

奈良時代には華やかな天平文化が開花したが、天災や飢餓・疫病などの不安が満ちていた。行基（668～749年）は民衆への仏教布教に励み、池・溝・橋・港などの土木工事を手掛け、人びとの心とくらしを救済した。

丁寧に削って形づくられた下層東樋の連結部

下層東樋

616年に伐採したコウヤマキの丸太をくり抜き、7本連結する。つなぎ目の先端は、上の写真のようにソケット状に加工している。下層東樋は、劣化した部位を修理しながら、平安時代まで大切に使われた。